ためには何が必要なのかと探ること。なかでも大きいのは「自分たちが、かかわること」。かかわることでつながりができるし、かかわったことが満足感になると思います。日本で高齢者の幸福度が低いといわれるのは、社会での活躍の場を失ったと思ってしまうことが原因のひとつなので、そこに居る必要性を感じられるような「かかわり」を作るのが大切だと思っています。

だから私が「しあわせづくり計画」で描き示したい「地域がみずからできること」というのは、顔がツナガル、人がツナガル、そしてそこに安全や幸福が生まれるであろう、かかわることで満足感も上がるであろうというようなことなんです。

山崎さん：だからこそ住民参加が不可欠なんですよね。行政は住民・人々の幸せを作るシステムである。あらねばならぬ。まさにそのとおりです。しかし、行政は個々人の人たちが何をすると幸せかを全部把握できているのかというと、やはりできていないと言わざるを得ないし、できているというとウソになる。それぞれの人たちに聞きに行き、その人たちに何をしているのが結果的に幸せなのかを、ちゃんと表明してもらわないといけない。

吉岡初浩（よしおかはつひろ）
高浜市長
1955年愛知県生まれ
高浜市議会議員を経て
2009年９月高浜市長に就任。
現在２期目

ただ、今の話のとおり、その人たちが主体的にかかわるという行為自体が、すでに幸せ度を少し上げることになっている。その上に個々人の違う幸せを選び取って、地域テーマ型のコミュニティみたいなものをつくると、自分が幸せだと感じるテーマのところに集まってくる。「やりたい！」と思えることをやっていたら地域のためになり、誰かに感謝されるという関係性の構築が、結局やっている本人たちの幸せ度を上げることになると思います。

市長：それは受け身の状況では絶対に生まれてこないと思っています。自分がかかわって進めていくところに一番大きな意味がある。

将来的に、例えば小学校区単位で地域計画を考え、予算を持ってココの部分だけはやろうというシステムもみんなで考えられるといいなと思っています。そこに至る経験が今は積み重ねられていると思います。それをつなげていくには、さっきも出ましたが、若い世代が今以上に興味を示してくれることが必要です。

「自分ごと」への転換

山崎さん：若い人たちがいきいきと活動できる場の担保は、どこでも課題です。おっしゃるように、そこができていないと次の世代につながっていかない。

市長：地域の課題の大半は「行政が解決するもんだ！」と思っているというようなことをよく聞きます。なんとなく他人ごとという感じですね。でもそうではなくて、地域の課題を「自分ごと」にしていくようにしなければと思っている

（上）洲崎公園桜祭りに集まった元気な笑顔。楽しく地域が集うのはまさに「土手の花見」
（下）高浜川での夏の風物詩「市民レガッタ」。市内外から若い世代がエントリーする。